

ジャン=ジャック・ブデュ著、遠藤ゆかり訳
『パブロ・カザルス：奇跡の旋律』
（創元社、2014年）

評者 坂東省次

昨年、『カザルスと国際政治』（吉田書店）が新進気鋭の国際政治学者細田晴子氏によって上梓された。世界的なチェリスト、パブロ・カザルスはこれまで翻訳を中心に日本に紹介されてきたが、はじめて国際政治の立場から書かれた同書は大変興味深い。その細田氏から『パブロ・カザルス：奇跡の旋律』の刊行にあたり監修をされたということで、一冊送られてきた。

細田氏は『日本語版監修者序文』でこう述べている。「カザルスの生きていた時代、彼は人を引き付ける木星のような強力な磁場であった。私を含め複数のカザルス研究者が、チェロを習うに至るのも偶然ではないだろう。そして21世紀の今もなおカザルスは生き続け、引き継ぐ使命を我々に啓示し続けているのである。」この意味で、本書が日本で刊行されたことは大きな意味があるだろう。

さて、カザルスが生まれ育った土地は、スペインの北東部に位置するカタルーニャである。著者は冒頭辺りでこう述べている。「カタルーニャ人にとって、カタルーニャは、中身にふさわしくない俗悪な宝石箱に入れられたダイヤモンドのようだった。彼らはスペインと関係を断ち、スペインから外に飛び出して、より輝かしい未来を手に入れたいと考えていた。」

以上の文面は、現在のカタルーニャの動きを見事に予測しているかのようである。今、カタルーニャは、スペイン国の経済危機の中にあって、何よりもスペインからの独立を考え、そこにカタルーニャの存在を見出そうとしているのである。

それはともかく、1936年に勃発し39年に終結したスペイン内戦によって、カザルスはフランコ将軍のいるスペインを脱出して、フランスに逃がれ、その後プエルトリコで生涯を終えることになる。彼もスペインから外に飛び出して、より輝かしい未来を手に入れた一人であったであろう。しかし、手に入れたより輝かしい未来とは、決して彼のチェリストとしての名声でもなければチェロから得た富でもないことは言う

までもない。カザルスはスペインという自由のない独裁の国を飛び出して、平和主義者として世界に生きたことこそが、彼の輝かしい未来のはずであった。

1958年10月24日、彼は世界人権宣言の採択10周年を記念して、ニューヨークの国連本部に招かれた。自由な国家への思いを託した『鳥の歌』でしめくくられたコンサートは、40カ国のラジオで放送された。カザルスは『鳥の歌』を演奏するに当たり、英語でカタルーニャでは鳥は「ピース」と鳴くのだと説明したとき、会場にいた多くの聴衆は彼の言葉を涙を流しながら聞いていた様子を映像で見た人たちもまた、決して少なくはなく、大いに感動したことであろう。

カザルスは1930年代からすでに日本でいちばん有名な外国人チェリストで、彼のレコードが世界で一番よく売れたのは、日本だったといわれる。そんなカザルスが1938年と39年来日する予定であったが、38年は前年に勃発した日中戦争が原因で、また39年はスペイン内戦が原因でともに来日が実現しなかった。初来日は1961年のこと、すでに85歳を数えていた。1957年以来カザルスの愛弟子であった日本人チェリスト平井丈一郎が帰国公演をするにあたり、指揮者として来日したのであった。

日本人チェリストの井上頼豊は、カザルスの来日を機に行われた公開レッスンを受けた一人であったが、その著『回想のカザルス』のなかでこう述べている。

「カザルスの日本に残した影響は、広く深い。世界の音楽家の中でも最長年月の間練り上げられた彼の演奏は、じつに自由で音楽的、まさに自然そのものに同化しようとする姿があり、それが人間生活にとってどんなに貴重なものかということ、しっかりと日本に残してくれた。そこにカザルス来日の特別な意味があったといえるだろう。」

ばんどう しょうじ（教授・日西交流史）